

2004年度 帯広支部月例第1位作品批評

(選考)橋本 博 氏(写真道展審査会員・道写真協会副会長)

今年も辻川支部長の依頼により2004年度、帯広支部月例作品の各月1席、計11点の選評及び、最優秀作品1点、優秀作品2点、準優秀作品3点の選出をお引き受けすることとなりました。

先ず、各月1席の作品の選評を行いました。以前にも述べたと思いますが、写真の審査は、そこに集まった作品群の中で比較、検討して選出するものであることを、ご理解下さい。一応、写真道展の審査基準にしたがって審査・選評を進めて行きました。

2月「陽だまり」杉田良二



大樹の根本に、しゃがみこんで頭をかかえているこの人物(男性)の職業は良く分からないが下層階級の人間の様な感じがする。縦位置の写真なので大樹の高さ、肌模様の面白さに目が移り、この人物、猫から伝わって来る物語り性が弱くなってしまった。この作品は第51回写真道展入選なので、作品集の写真と比較してみると、人物中心に横位置に構成しています。入選作品のほうが狙いが明確で物語り性があります。縦位置では入選しなかったでしょう。入選作品を、さらに質を高めるには、この樹の左側に男性と対照的な服装一背広姿の中産階級のサラリーマンでも配すればよい。適当な人物が来るか来ないかは、無論、運やチャンスによるものですが、念ずれば意外と達成できるものです。バブル時代は、日本の家庭の80%は中産階級と言われていましたが、現在は3階級に変革し下流階級が増加したと言われています。その現状を画面で象徴する作品になったと思います。

3月「年輪」添島 均

初冬から真冬の季節、結氷した樹木の切断面の年輪を俯瞰的に撮影した写真と思われます。面白いモチーフを発見したことは評価しますが、画面上部の半円形の物体が邪魔な存在です。カットしても良いのだが、切断面の円形のフォルムがくずれません。年輪、そして中心部の結氷による奇妙な模様、放射状に広がる結氷の線 etc をさらにシャープに描写してほしかった。完成度に劣るのが残念です。再挑戦してください。



4月「滝一景」吉仲 功



滝の写真は非常に多数、応募され、従って審査も厳しきになります。この作品は一條の滝をスローシャッターで流し撮りし、水流が、あたたかも光の束の如く描写した表現が効果的で、音のない世界、静寂な雰囲気伝わってきます。画面、右側の川の流れも奥行きを感じさせます。

5月「子供の日」添島 均

魚眼レンズを活用して、五月の青空を泳ぐ鯉幟をボリュームのある集団として表現し、子供を抱く親、カメラマンの存在も適切で、また、地面の鯉幟の影も効果的です。色彩的描写、そして光と影の採り方は文句のつけようがありません。爽快な迫力ある優作です。

問題は魚眼レンズによる地平線(ピンク色の道路)の曲線です。この下向きの湾曲は、やはり不自然な印象を見る人に与えます。魚眼レンズを使用しても地平線が、ほとんど水平(直線)となるカメラの「かまえ方」があります。それはカメラを水平に「かまえる」ことです。ただし、水平線が、ほぼ画面の中央に直線として描写され、画面が二分されるので上・下とも魅力ある被写体が存在することが絶対条件です。

この作品も、地面の鯉幟の影が、もう数個、写る様にカメラアングルを少し下げることにより、完全に地平線(ピンク色の道路)が水平(直線)にならずとも、湾曲による違和感はかなり緩和されると思います。私の経験によれば縦位置のカメラポジションが、より効果があります。

この魚眼レンズでの地平線の湾曲の問題は参考意見として付記したものであることを、ご理解ください。



6月「息吹」佐藤 豊

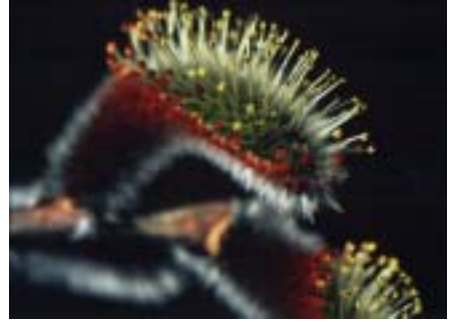


この生物が何者であるか、幼虫の様だが正直に言って私には解からない。非常に珍しいものらしいが、小さい被写体をマクロレンズで撮影したので、虫の顔?のごく一部にしかピントがきていない。道展のネイチャーの部には適さない作品と思います。題名の後に生物学的名称を付記したほうが良いと感じます。

道展のネイチャーフォトは単なる野生動植物でなく、作品として「アート」的表現も必要な条件であることを認識下さい。

7月「満開」佐藤 豊

この作品も、前の写真と同様なことが言えます。たしかに綺麗な花のアップ写真だが、その色彩も(バックが黒のためか)なにか毒々しく、花の美を素直に受け入れられない。題名の後に花の名称を付記すべきであると思います。背景の色彩への考慮、画面構成の工夫への配慮が必要です。



8月「出会い」西島啓喜

これは、現在大ブームとなっている旭山動物園の水中円柱の写真だと思います。このモチーフ、今年は多く応募されること確実です。他支部の例会でもかなり見かけますが、まだ、これは、と思われるような優れた作品にはお目にかかっていません。この写真、海豹の位置がもう少し下に下がった方が良く、手前の二人の子供より円柱の向こう側にいる横にゆがんだ子供を撮り入れた方が画になったと思います。シャッターチャンス、カメラポジション共にまだレベルに達していません。



9月「潮騒」佐藤 豊



前景の右・下の岩、中景の岩、そして遠景の絶壁との色調の差をうまく描写し、遠近感を表現しています。波のフォルムに迫力がないのが残念であり中景の岩の上部にも「波しぶき」があれば、さらに作品として強さが増したと思いますが、このままでもまとまった臨場感のある作品です。

10月「錦空」杉田良二

紅葉の色彩をバックに前景に黒い大樹をシルエットとして画面を絞めています。この手法も、すでに多用され、これに太陽の放光を取り入れた作品も発表されています。この手の写真は黒い幹が造形的でシンプルなフォルムであること、遠景の紅葉の色調とのバランス如何にかかっていると云えましょう。

残念ながら、この作品は前景の幹のフォルムに魅力がなく、バック(遠景)の紅葉・黄葉の色調も濃すぎます。矢張り四つ切に伸ばしてカラーバランスを調整して出品すべきです。



11月「もうお帰りよ」佐藤 豊



日差しが強い時刻、被写体とカメラの位置・角度に十分気をつけてもらいたい。肉眼で見た瞬間は素晴らしいモチーフを発見したと思ったことでしょう。しかし、主役である被写体に絞り込めず、周辺に色々の要素を取り入れすぎました。ピントも白いベンチに合い、これが目をひきすぎます。二人の女性、子供の顔も陰となり、生きていません。人物の動きに写真になる良い瞬間があった筈です。

12月「愛」吉仲 功

丹頂鶴、流し撮りの作品で、二羽の重なり具合のフォルムが面白く、成功したと思います。しかし、下の二つの鶴の「ぼけ」がうるさく、右下の「ぼけ」は、まだこのままでも助かりますが、左側の四角形の「ぼけ」はどうにもなりません。地面と同じ位に焼きこむしか方法がないと思います。ここの処理に成功すれば、動きのある格調ある鶴の写真となるでしょう。(下は全体的に少しカット)

